

「最終講義」から1年

昨日2月21日は私の「最終講義」から1年経つ。2時から人文社会学部の201教室で大勢の参加者の前で講義したことが忘れられない。教室の中ほどで熱心にメモをとり、コメントを書いてくれた石川洋明さんは、もういない。この1年、苦しいこと、悲しいことも多かった。そんな感慨にふけりながら、楽しみにしていた藤田栄史さんの「最終講義」に出席した。

思えば藤田さんとは長いつき合いである。地域構造研究会で「トヨタと豊田」を共同研究していた頃からであり、出会ってから30数年にもなる。若々しく行動的であり、「キレ」を感じさせる社会学者である。人文社会学部の創設にあたり、愛知教育大学に在職していた藤田さんを「スカウト」？した。人文社会学部、とりわけ現代社会学科にとって、藤田さんの「存在」は欠かせないものであった。地道な調査研究にもとづく、労働社会学などの講義は、学生から好評であり、多くの学生を引きつけた。

現代社会学科の「看板講義」である社会調査実習は、藤田さんのおかげで持続的発展が可能であった。藤田さんをつうじて、東海社会学会に参加して、この地域の社会学者との交流の機会を得ることができた。

藤田さんは私にとって「良き相談相手」でもあった。学科主任や学部長の頃などに、迷うことがあると、3階の藤田研究室を訪ねた。そんなに多くを語るわけではないが、的確なアドバイスをもらったことが多い。

ここ数年、藤田さんは「難病」に苦しめられながら、講義研究を続けてきた。研究科長・学部長の「大役」もこなした。正直なところ、無事に定年退職の時期を迎えられるか、「最終講義」を聴けるか心配であった。



こうして多くの参加者（藤田ファン）のもとで、「最終講義」を開催できて、1年先輩の元同僚として嬉しいかぎりだ。写真は2月21日2時30分から201教室で行われた藤田さんの「最終講義」である。テーマは「労働・現代社会・大学」である。講義をする藤田さんの前に写っているのが、京ちゃんである。ここで京ちゃんと再会できるとは思っていなかった。まだ書きたいこともあるが、次回のレポートに回すことにしたい。

(2015年2月22日)